

5月下旬から6月中旬頃にみられるジャガイモ病害



1. ジャガイモ青枯病

株の中で茎ごとに萎れはじめ、しだいに全株が青枯症状になります。萎れた茎を切断してみると道管部分が褐変しています。顕微鏡で観察すると褐変した道管内には病原細菌が充満して黒っぽく見えています。

ナス科青枯病の簡易診断では、地際茎の切り口を水につけて流下してくる白色細菌泥を確認するのが一般的ですが、地際茎の切片を顕微鏡で直接観察する方法もあります。薄切後、時間をおくと細菌が拡散してしまうので、細菌の褐変道管内での局在を確認するには、薄切後ただちに観察します。



2. ジャガイモ葉腐病

茎の地際部から感染、侵入します。下位葉の葉柄にかけて、表層的に軟化腐敗が進行するため、葉柄の付け根が侵され下葉から枯れ上がってきます。腐敗部の表皮はズルッと剥けやすくなっており、剥ぎ取って顕微鏡で観察すると、病原菌の不完全世代であるリゾクトニア菌の菌糸が組織内に充満しているのが見られます。

塊茎表面に黒色菌核を生じるジャガイモ黒あざ病と同じ菌ですが、このように葉腐れ症状を呈することがあります。



3. ジャガイモ夏疫病

径数ミリの小斑点から輪紋を有する黒褐色大型病斑まで混在していました。小斑点は葉上での二次感染と思われます。病斑周囲は黄化するため、密に病斑が形成されると黄変部が融合して老化葉の枯れ上がりのように見え、立枯れ性病害と混同しますが、葉枯れ性の病害です。

病原菌の分生子はアルタナリア菌としては大型であり、分生子本体はあまり角張らず引き締まった細長い形態で、先端のクチバシ状突起は長く伸びています。